

---

# お姫様のわんこ

鮎塩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お姫様のわんこ

### 【Zコード】

N1011E

### 【作者名】

鮎塩

### 【あらすじ】

安宿で目覚めた俺は、首に手をあてて固まる。な、なんで首輪が！？つて、考えるまでもなく犯人はあいつしかいない……。「ふつふつ、これでユージンは私の犬だな！」見た目だけは可憐な少女に振り回される青年の物語です。

頭上高くの天窓から降り注ぐ、青白い月光はひたすらに夢く、頼りなく。

それだけしか光源のないこの閉ざされた部屋では、物の輪郭がかすかにしか掴めない。

手を差し出したまま黙ってしまった少女の表情だつてわからない。

泣きそなのが、憤つてゐるのか、微笑んでゐるのか 見え  
ないけれど、一言では表せぬ複雑な表情をしているのだろう。

その手をとつてしまえば後戻りは出来ない。

でも。  
だけど。

……それでも、差し出された手のひらから目がはなせなくて。

彼女は、この私から見れば幼い少女は、とてもとても、悲しいくらいに優しいから。

悲しいほど強く、悲しいほど真っ直ぐに気持ちをぶつけてくれるから。

差し出された手を嬉しいと思つてしまつたから。

彼女は何も言わない。

ただ待つている。

私の選択を、決意を、覚悟を、理解を、意思を。

試しているわけでもなく、拒絶をも恐れず、ただ優しい沈黙で待つ  
てくれている。

彼女は賢い。

私を連れ出すことの意味を、分かつてないはずがない。  
どれほど罪深いか知つても、それでもその手を差しのべてくれた。

嬉しいと思つてしまつたから。  
きっと答えは最初から出でていたのだ。

緊張にか、恐れにか、この身を浸す歓喜にか、意思でせどりこもな  
らない身震いが襲い、私は自身に苦笑する。

暗闇の日隠しのおかげで、彼女には気づかれていないと思つけれど。  
ああ、でもせつかくの彼女の表情が見れないのは悔しいな。  
はるか天空から見下ろす鷹のよつな、彼女の凄烈な意思がこめられ  
た瞳が見れないのは残念だ。

私は余韻に震える手を、少女の小さなてのひらに重ねた。

「アンジェリカ

」

その思いに応えよ。

もう一個の連載とかいろいろ行き詰つた時の息抜きに、コメディタッチ（？）で始めてみました。

珍しく恋愛要素が少しあり。こつちは10話とかからない予定です。最後までのんびりとお付き合いいただければ幸いです。

## 01・命名ボチ？

突然だが、悪夢と聞くとどんな夢を思い浮かべるだろうか。やつぱりこう『怪物に追いかけられているのになかなか前に進まない夢』とか、『試験当日なのに何にも勉強していない夢』とか、そんなものが一般的だろうか。

それらも確かに悪夢なのだろうが、俺的には幸せな夢じゃ悪夢だと思つのだ。

夢は願望の表れだといつ。

その夢が幸せであればあるほど、覚めたときの空しさは形容しがたいし、なにより自身の欲望を夢という形で目の前に突きつけられて平静でいられようか。俺には無理だ。

という訳で朝つぱりから自己嫌悪まつしひりといつ、嫌な図が出来上がるるのである。

「うーあ……」

許される夢を見た。

俺の精神の安定のために仔細は省くが、懺悔をする夢を見たのだ。すべての罪を許される夢を。

あれが俺の望みかと、自分の精神を疑つ。

なんて、醜悪な。

最悪の目覚めのまま上半身を起こす。

額を片手で覆つてうつむき、溜め息を一つ吐き出した俺は、" チヤリツ " という耳慣れない金属音に動作を止めた。

そのまま数秒固まる俺。

おそるおそる手を喉元へあてると、硬質な感触がはつきりと存在感を訴えていた。

く、首輪……？

お姫様のわんこ

「アンジェリカア――――――！」

近所迷惑をかえりみず力任せに戸口を開ける。安宿の扉はかなりお年寄りなのか、錆びた蝶番がギシリと抗議をしてくるが無視。狭い部屋の中央、お世辞にも柔らかいとは言えない質素なベッドに、目的の人物はいた。

「……アンジエリカ……アンジエー！」

ゆさゆ。

しかしふいアで眠るお姫さまは、俺の揺さぶる手をペシッと叩き落し、寝返りを打つて背を向ける。戸を開け放つ音にも反応しなかったんだから、この程度で起きなのは当然。

「アンジエ今すぐ起きる説明じりにんないとおるのはお前しかいないんだよー！」

渾身のテロップを無防備な額に しようとしながら近づけた手首をガツシと掴まれ、掛け布団の中に引きずり込まれる。

うひ、アンジエの顔が田の前に！

まだ肌寒さの続く早春のも悪かった。あつたかい抱き枕発見とばかりにアンジエは全身で絡み付いてくる。

とりあえず彼女の怪力はしゃれにならん。普通に死ねる。

「ぬー」

「つだだだだー！ひ、絞め落とす気かー！」

「あつたかいー……」

「いい加減に、起きうひ

「むわつー？」

唯一自由になる右手で、彼女の耳の裏側に触れる。数少ない弱点らしこ。

「む……？…………ああ、おはよゴージーン……」

「おはよ。首輪。説明。早くー！」

と言いながら、自身の首を指差す。

俺が必死で単語でまくし立てる様は、悔しいことに余裕がないのが見て丸分かりだらう。

いや本当、朝起きたら金属製の黒い首輪がはめられてるとか、なんの[冗談かと思つただ]。

しかもどうやっても外れないそれは、もちろん俺の記憶にないものだ。

呪いでもかかってるんじゃないのかこれ。

アンジューは寝ぼけた顔をこすりながら、俺の首筋に視線を定める。

「首輪だな」

「ああ、首輪だ。どうからどう見ても紛まわ<sup>まわ</sup>すことなき首輪だ。どうせお前だらうがコレをやつたのは」

「どうせとはひどいな、コーディン」

「……否定しないイコール肯定と取るぞ？」

もう目も完全に醒めただろうにアンジューは俺に抱きついたまま離れない。しうがないので、そのままじっと見つめ合つ。

しばらく俺の抱き枕状態が続く。

彼女も年頃だらうに一切色っぽい雰囲気がないのはなぜだらう、俺の思考が脱線し始めたあたりで、アンジューは答えるよつてマフと笑つた。

「うむ、予想通り似合つてゐるだ

彼女の細くも剣をたしなむ無骨な指が、首輪の輪郭をつつとつなげる。

思わず愛ある頭突きをかましてしまった俺は悪くないと思います。

……うつとも効かなかつたけどな！

\*

アンジエ曰く、夜中に俺の部屋に忍び込んで首輪をつけていってく  
れたそ�で。

「…………なんでわざわざわんなことを…………」

「氣づかぬコーディングが悪い。それでは簡単に寝顔を搔かれるぞ?」

ふふ、と意地悪く微笑みながらも、アンジエはちやくちやくと身支  
度を整えていく。…………のだろう多分。

俺は彼女に背をむけベットに腰を下ろしふて腐れている。

彼女は無頓着といふか開けつ広げといふか、着替えを見られたとて  
たいして気にもしないだろうが、まあそこは常識として。

「お前の気配なんて読める訳ないだろ。しかも何で外れないんだよ

「これ。色々試したけどビクともしやしない」

「ふむ、それはそうだろう。というかそうでないと意味がない。せっかく苦労してもモモとった報酬だぞ」

「報酬？…………あ」

首輪にカリ、と爪をたてる。そういうや、この前受けた依頼は何かおかしくなかつたか。

「神世代遺跡の調査…………なんであんな低報酬で受けたのかと思つてたら、まさか」

「ん、察しがいいな、そのまさかだ。別途で遺跡から一つ好きなものを持つていいといつていいと裏取引をだな」

「つてことは、この首輪は…………」

「太古の呪術のかたまりだな」

「…………」

それつて外すにはじれぐらいの奇跡が必要なんでしょうか。

世界各地に散在するその遺跡群は、古代に存在した天使が造つたとかされているが本当かどうかは判明していない、そんな謎だらけの遺物である。

なにかと危険の多いこの調査随行を、アンジェリカが勝手に引き受けってきたのだが……。

「とりあえずその首輪、従来の貴金属なんぞ比べ物にならん硬度で切斷は不可能だな。あらゆる魔力干渉も打ち消すから、魔術での破壊も無理だろ?」

「…………。アンジェ、それだけじゃないんだろ?」

「首輪の機能のことか」

「そう」

「ゾウが踏んでも壊れないという素晴らしい機能だと思わんか」「だから。ぜつたいそれだけじゃないだろ?」

アンジエの突拍子もない行動にはよく振り回されているが、基本的に意味のないことはしない主義だ。

慌てふためく俺を見たいがためだけに、こんなことをするとは思ひがたい。(や、ありえなくもないが)

「それはだな、ユージン。はめた者が念じたとたん、はめられた者は息が出来なくなるという、不思議な首輪なのだ」

「……………アーンージューセーん…………?」

「ふつふつふつ。私の命に逆らひと苦しくなると血ひ寸法だ。これで、ユージンは私の犬だな!」

俺が呆れた目で振り返れば、アンジエは満足そうに頷きながら、蜂蜜のよくな甘い色合いの髪を結い上げていふところだつた。窓から差し込むさわやかな朝日が、彼女をまるで天使のように神秘的に見せる。

ハニーブロンドの髪に、アメジストの瞳。見慣れているはずなのに感動を覚えるアンジエの容姿に、不覚にも一瞬見とれる。

見た目だけなら愛らしげのだが、このちつさこ少女は。

「よし、着替え終わつた」

アンジエは鏡の前でくるりと回り、最終チェックを済ましたようだつた。

彼女の普段着は、可愛らしさを損なわない程度に動きやすさを重視して作られた品だ。

深緑を基調に金糸の縁取りが施され、騎士服とドレスを足して割つたようなその服は、彼女の凛々しい雰囲気を良く引き立てていた。

ちなみに俺は上から下まで真っ黒で、特徴と言えば額の斜め傷ぐらいだ。ただ肌だけは我ながらどうつかと思いつつ白い。

「さて、出かけるぞポチ！」

「ああもつ……そのへんの追求は置いておいて。アンジュー、ちょっとこいつおいで」

「うむつ、なんだ？」

チョップ。しかし片手で防がれた。

「……ふふふ、ご主人様に対し随分だな、ポチ……」

「……ははは、じゃれ付いたぐらいで怒ると器が知れるぞご主人様……？」

ギリギリギリ。

俺たちの『鍔せり合い』ならぬ『手せり合い』にアンジューは余裕の顔だ。

ああ……これぞ現実に横たわる悲しくも厚い壁。俺よりもアンジューの身体能力の方がはるかに高いのだ。

総合的に負けているつもりはないが、徒手空拳では勝てる気がしない。俺も鍛えてはいるが、はつきり言ってアンジューとは紙と石ぐらの差が……やめよう、むなし。

「つていうかポチつて何だ！」

「嫌ならクロでもいいのだぞ？」

「ははははは」

「ふふふふふ」

しばし不穏に笑いあつたあと、アンジエは真剣に言い放つた。

「まあ、落ち着け。私とて無意味にからかつたりはしない」「からかつてたのも本音なんだな？」  
「慌てつぱりも可愛かつ……面白かつたが、本題を通すにはこうしてたほうが早いかと思つてな」  
「え？ 最初なんていつた？」  
「……で、本題だが！」

アンジエは「ほんとワザとらしく話を遮り、意味ありげに腕を組んで窓の外を眺めた。

「先日受けた依頼でな、ちょっとお前が嫌がりそうな内容だつたら、ついな」「つて、また勝手に受けてきたのか！」  
「ああ、潜入任務なんだが……」

アンジエは少しもつたいつけて、窓に顔を向けたままチラと俺に目線だけよこす。

「必要枠が女一人なのだ」「開き直るなつ……、つて……え、」

まさか俺が嫌がりそうな仕事つて……。

「アンジエ……まさか俺に女装しようと……？」  
「もう受けてあるから、キャンセル不可だがな」  
「どうかなんで受けたんだ、そんな依頼！！」

アンジエが『とある屋敷に潜入するんだ』とか、『メイドの空きを二人分とるのがやつとだつたらしい』とか、『任せろ、きっと死ぬほど似合ひ』とか言つてゐるが、耳を右から左へ抜けて頭に残つてくれない。

頭には、拒否する=窒息という理不尽な等式だけがグルグルと回っている。

俺は真っ白に燃え尽きて、ベットに仰向けて倒れこんだ。

## 02・無茶です、『主人様』。

円形に開けた広場には朝も早いというのに人で溢れかえっている。

屋台の屋根から飛び立つ小鳥の羽ばたき、おばちゃんの大きな寄寄せの声、胃を活発化させる串焼きのいい匂い。

ここでは世界でも有名な、大規模の『朝市』が開かれている。

うう……予想以上の何という人ごみ。

「ユージンー何をしている、早く行くぞっ」

アンジュは食欲に眼を輝かせて、動こうとしない俺を引っぱる。

「なあアンジュ……別の、もっと人の少ないところで食わないか？」

「何を言っている、これを田端でにシルヴァニアに来たようなものだぞ？ 第一腹が限界だ。今さら場所を変えるなどありえぬー。」

「……もっと高い宿にすればよかつたよ」

あの扉一つでそれと分かる安宿に、まさか朝食がついてくる訳もない。

とにかく何か食べようと、うつして街にくり出したのだが……ここまで人が多いとは。

いつもなら祭りみたいな雰囲気すら樂しい」と思えるのだろうが。

「何、大丈夫だユージン。万象の精靈に誓つてもバレはせん」

アンジェは俺の手を引きながら振り返る。

「つむー、とっても美人だぞつー」

「…………傷口をえぐるなああーー！」

スカートって歩きにくいんですね……。

お姫様のわんこ

「さて、出かけるぞユージン。これに着替えろ」

「いやアンジェ、考え直せ。冷静に考えて成人男性に女装なんて無理だろ！」

アンジェが渡してきたナニカは、どう見ても綺麗な女物の服だった。

しかも背の低いアンジェが持っているはずがない丈の。

「大丈夫、サイズはピッタリのはずだ」

「俺の話聞いてた！？ いや、いつ測った、とかも気になるけどまあいい。それより依頼は午後からだよな？」

「うむ」

胸を張つて頷くアンジェ。

「ならなんで、今から女物を着なきゃならんのだっ」

「やるからには早く慣れておいたほうがいいだろう。お前もバレないかどうか、他人の眼で確かめて置きたいだろ？」

「慣れ……つて……、慣れたくない……」

でも確かに、本番のメイド服（きつとフリフリひらひら確実）などもつとひどいのだ。これで音をあげていたら、依頼など到底こなせないだろ？

「……もう、そんなに嫌か？ なら条件を出そう」

「……条件？」

よつぽど俺の顔が悲壮に見えたのか、珍しくアンジェが譲歩に出る。

「午前中に誰かが一度でも女装と見破つたら、この話はなかつたことにしよう。違約金は惜しいが」

「む……」

「どうだユージン？」

「…………それでも嫌だつたら？」

「お前の主人は誰だ？」（意訳：首輪がうなるぞ）

「……はあ。わかつた、一応着るが、期待にそえないこと確実だ

ぞ

「ふふ、それはない」

アンジンはよほど自信があるのか、余裕綽々の顔で首肯してみせた。  
よし、それなら眼に“毒”見せてやるー。

.....。

スレンダーな美女がじつちを呆然と見ている。

誰あうひ、……俺だ。

地毛と同色のかつらを被り、紺色のワンピースドレスに黒タイツを  
あわせ、ふわふわの黒いカーディガンで肩や手をごまかし、そして  
軽めの化粧を施す。

それだけのはずなのに……アンジンの言ひとおり、鏡に映つた姿  
は女性にしか見えない。

思わず鏡を磨いてその鏡像が本物か確認してしまつたほどだった。

確かに美形だと言われたりはするが、それと女装が似合ひのとは別  
問題のはずなのに。

しかも俺の體は平均ぐらごあるところに、だ！

「おお、すうじいなコージン！腰を絞らなくても充分細いぞ」

「そんな感想はこりない」

「しかし白いな。……ふむ、化粧はほどほどの方が惹き立つな」

「そんな解説はいらない！」

俺を着付けるアンジエは生き生きとしていた。水を得た魚……訂正、水を得たサメのようだつた。

「つむつむ。ちゅうど首輪で喉仮が隠れるな。あとは声だが、ほれ」

「…………なんだこれ」

「変声器。前の前の、さうに前の遺跡でかつぱりつてきただものだ。逃亡時に役立つと思つて持つてきたのだが、思わぬところの田の畠を見たな」

「…………」

「魔術で変えてもいいが、それだと感知されれば一発でバレるからな。せつかく完璧なんだ、止めておけ」

「…………」

と、そんなやつ取りがありがつて、今に至る。

俺たちは波を漂つてアラのまゝ、適当に流れながら陸合を物色していく。

「コージン、肉だ肉。肉を食おう。この地方はラム肉が最高だそう

だぞ

「はいはい、はしゃぎ過ぎて逸れないよ。」。しかしあ前、よく朝からズツシリしたもの食えるな……」

「私の胃をなめるなよ。コーディン」、朝飯はちゃんとどうぬといつか倒れるぞ。コーヒー一杯だけなど朝食を愚弄しているのか？」

「お前にそ「コーヒーをなめるな。アレがないと朝は頭がすつきりしない……。つと、すみません」

通行人の足を踏んづけてしまい反射的にあやまる。普段ならしないような些細なミス。

相手は気を悪くした風もなく……むしろ気色悪いほど機嫌よく、いえいえと言いながらすれ違つていつた。

それは男二人組みで、去つていつた方向から彼らの会話が漏れ聞こえる。

「うむ、私たち二人ともかわいくてらつときー、だそうだ」「

「知らん。気のせいだ。俺は何も聽こえなかつた！」

「うむ、鳥肌すごいなコーディン」

女装だとバレれば恥だし、ばれなくても男として恥だ。どっちにしろ恥ならとつととバレて欲しいと、口調すらえていいのだが気づかれる気配もない。よく考えれば、普段アンジェの方がよっぽど男前な話し方なのだから、口調ぐらいでは違和感にさえ成らないかも知れない。

「まあ、接触を機会に声をかけてくるような連中ではなくてよかつたな」「……想像したくもない」

「さて、コーディンの希望が潰えたところである店に寄るぞ。スープ

が美味そうだ」

「まだ潰えてない！」

「おつ、見ろ看板猫だ。スープついでに触りにいくぞ」

「こりつ、触るなら食事のあと一毛が飯に入るでしょ！」

それからは、自由奔放少女を窘めたり、男どもの生暖かい視線を必死で見ない振りをしたり。

街の中央にそびえる精霊教会が正午の鐘を告げても、最後まで見破られることはなかつたとだけ言っておく。

ちなみにアンジェは勝ち誇つたような顔で誓めてくれた。…………そこは頼むから慰めてくれ。

\*

この世界に神はない。

今は伝説や遺跡にだけかすかに残る、かつて天使と人間が共に暮らしていた時代の痕跡。

その頃には確かに創生神が存在していたそうだ。

しかし唯一の神は一人の墮天使と相打ちとなつてしまつ。

墮天使は神の最後の力で監獄世界へと落とされ、ついには神自身も力尽きて消滅した。

やがて天使たちが一人一人とこの世界を去り、あるいは自ら命を絶ち姿を消していく中、大変だったのはむしろ人間たちだった。

世界の安定を保っていた天使がいなくなつて、一部の地域は砂漠化し、あるいは零下に投げ出され、自然災害が発生し、病疫が襲い掛かってきたのだ。

しかし見捨てられたこの世界にも、人と生きようとする天使たちがいた。

それらは極少数ではあつたが、人を導き、時には人と交わり子を成して、少しずつ人の生活を改善していった。

以前ほどの豊かさではなくても、たとえ貧富の差や地域の格差は変わらずとも、それでも人々は天使たちに感謝を捧げた。  
やがて少数の天使らは人の血に埋もれて消え、全ては記憶の果てへと薄れしていく。

そして人間の信仰は自然そのものへと移り変わつていき

『神世代』と呼ばれる時代は終わりを告げたのだ。

……と、ここまでが、現在もつとも有力とされている説である。

要は現代で盛んな宗教は、自然崇拜であるということだ。

「にしても、精霊教会の依頼は何度目なんだかな」

「すっかりお得意様になつたな。…………仕方ない事とはいえ、つと。着いたな、ここだヨージン」

「……ああ」

御者に料金を握らせ、黒塗りの馬車を降りる。そろそろ太陽が月と交代するという頃、俺たちは目的の屋敷に到着した。

自然崇拜、その信仰の集約が『精霊教会』。

永年第一位を誇る、最大規模の世界宗教である。

その信仰とは、自然界のあらゆる存在には靈魂かれら、精靈が宿り、あらゆる現象は精靈の意思によるというも。

簡単に言えば、『嵐に宿るあらがぶる魂よ静まりください』、もしくは『豊かな土壤のお陰で今日も食事にありつけます、水や大地の精靈さんありがとうございます』などといったような。

そして『精霊教会』を語るにおいて、『神世代遺跡』は欠かせないものの一つである。

精霊教会は各地に支部を持ち、その情報網と人材を駆使して『遺跡』の管理をしているのだ。

すべての国は所持する遺跡を教会に登録する義務を負い、どれほどの大國であれ遺跡の隠匿は破門を食らうほどの重罪とされている。

という訳で、そんな教会からの依頼とは。

「『未登録遺跡』所持の摘発、か。端っことはいってこんな市街地にあるもんかね」

「それを調べるのが私たちの仕事だらつ」  
「まあそつなんだけな……、むしろこんな事してまで無かつたら俺は泣く」

古都シルヴァニアのはずれ。

俺たちは大きな屋敷 小さな湖なら丸」と収まりやうなほじの鉄柵<sup>てつじ</sup>の門と対面している。

決して成金趣味なものではなく、観光名所にもできるほど調和のとれた建物なのだが、ビルしてか長居できない空氣を漂わせている。

お前らは誰だと冷たい眼で見られている心地だ。

「さて、いよいよ持つて逃げられんぞ、（メイド服の）覚悟はいいか？」

「一思<sup>い</sup>いにやつてくれ」

もう朝の実践で、吹つ切れではないものまで吹つ切れた。恐れるものなど何も無い。

さすがに色仕掛けをして来いとまで言われば逃げるが。

わかつたとアンジ<sup>H</sup>は頷いて、門に備え付けてある鈴紐を引き鳴らす。

それは涼やかな音をたて、客の来訪を邸内へ伝えた。



02・無茶です、ご主人様。（後書き）

やりたい放題です。……多分次もやりたい放題です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1011e/>

---

お姫様のわんこ

2010年10月9日06時27分発行